

去る6月15日、(株)ナイスも組合員であるエル・チャレンジの10周年が盛大に開催された。ボクは、理事長をさせてもらっている関係で、基調報告をさせてもらったうえに、生まれて初めて感謝状を贈呈するという晴れがましい役まで努めた。

報告の中で、ボクは、有正修さんという人の名前をあげて、感謝の意を表した。2003年、大阪府が、施設などの清掃管理の発注に当たり、従来の価格中心の評価を変え、障がい者雇用など社会的価値をも評価する「総合評価入札」を導入した時の担当部署である用度課長という要職にあったのが有正さんだった。ボク達と府の職員さん達は、それこそ夜を徹して、部署を超えて、入札の評価項目を議論しあった。有正さんは、懐の広い人で、小難しい討論を辛抱強く吸い上げてくれて、総合評価を誕生させてくれた。議論が峠を越えたある夜半、彼はボクの耳元で、「いい仕事させてもらった…」と呟いた。それが、ボクが聞いた彼の最後の言葉だった。間もなくして、ボクは、通夜の席で、彼の遺影に手を合わせていた。多数の関係者に、エル・チャレンジ10年の感謝を述べたかったが、彼の言葉がずっと残っていたので、話させてもらった。

10周年で感謝状を贈呈したのは、梶本さんという前の府副知事、神尾さんという元府福祉部長、そして、中川治さんという元府議の三人だった。いずれも、エル・チャレ

ンジを「行政の福祉化」と位置づけて育ててくれた功労者だった。ボクは、報告で、「行政の福祉化」とは、福祉は特別の部署でやられるものではなく、すべての部署で「福祉を興す」というものだということを訴えたかった。そして、ボク達は、とうとう入札という制度で「福祉を興した」。「いい仕事をさせてもらった…」という呟きがすべてを物語ってる、そう思った。

三人の中の一人、中川治さんは、府議から国政に挑戦し、苦勞を一人でしょい込んでしまった。梶本さんが、ボクへの称賛のように「使命感」と語ったその時、ボクの頭の中で、中川さんが走馬燈になった。10年前のあの頃、ボク達は、中川さんという人の、並外れた使命感に火を点けてしまった。そして、彼は、府議を捨て、火中の栗を拾いに行った。そのうえ、成人性アトピーという辛い疾病との葛藤の日々までしょいこんでしまった。ボクは、壇上で胸が詰まったが、公の席だったから、政治のことは遠慮して言わなかった。

エル・チャレンジの10年の節目は、中川治さんの当選で飾りたい。ボクが言いそびれた、あの日の、締め言葉である。



THE RC SUCCESSION
カバース

86年4月28日、ソ連（現ウクライナ）の原子力発電所が爆発を起こし大惨事となった。その後チェルノブイリ原発事故として世に知られることになる。僕はこの数日後に家族とピクニックを楽しむ予定

をしていたので、放射性物質の降下を心配したものであった。この事故を皮切りに世界的な反原発運動が盛り上がり、原発推進派は必死に防戦した。原発の関係書が出版され、市民レベルの集会などがあちこちで立ち上がる。

88年、忌野清志郎率いるザ・RCサクセション（以下RC）が「カバース」というアルバムをリリースした。洋楽の古典とも言えるヒットミュージックをカバーし、清志郎や仲井戸らの訳詩の素晴らしさも手伝って、いかにもRCのワイルド感あふれる、それでいて緊張感と楽しさをあわせ持つ素晴らしい作品に仕上がった。作品中、とくに「明日なき世界」（B・マクガイア）、「ラブミー・テンダー」（E・プレスリー）、「サマータイム・ブルース」（E・コクラン）などの曲は、明らかに反核・反原発をテーマに異訳されて歌われている。それらは、もともとRCの社会的視点であったと思うが、時節も彼らの音楽に加勢した。このレコードは、今

は亡き嫁さんへのプレゼントに送ったものだ。

—熱い炎が先っちょまで出てる 東海地震もそこまで来てる けどもまだまだ増えていく 原子力発電所が建っていく さっぱりわかんねえ 誰のため？ 狭い日本のサマータイム・ブルース（サマータイム・ブルース）。

ところが、アルバム発売の直前、EMIレコードに親会社東芝から圧力がかかり、発売中止に追い込まれてしまう。東芝は原子力発電に関わる機材供給会社であり、反原発ロックで“ケイハツ”されることは会社の一大事であった。他のレコード会社がこのアルバムを引き受け、何とこのアルバムはオリコンチャート第1位を獲得したのだった。

過激でヘビーな曲が多いが、軽快で時には皮肉な曲もある。僕は、“ケイハツ”曲よりこれがRCのロック魂といえる、ストーンズのカバー「黒く塗れ」が好きだった。

—花も海も空もまっ黒 心の中も外も真っ黒 風も家も真っ黒 俺の土地も車も真っ黒 ずっとずっとずっとブッ飛んでいたい 世の中全部黒く真っ黒く塗りつぶせ どうせなら黒く黒く— アナーキーで、とにかくオレは自由に生きてえんだから、てめえら邪魔すんな、という叫びがすごく気持ちいい。それにしても、清志郎のあのパフォーマンスとダミ声は一所懸命すぎて、ちょっと可愛そうなくらいであった。 合掌。